

# 亡くなった人との VR「再会」をめぐる

折田明子 | 関東学院大学

## 亡き娘のVR

7歳の娘を病気で喪った母親が、娘本人の姿を再現したバーチャルリアリティ（VR）で3年ぶりに娘と「再会」したドキュメンタリーが韓国のMBCで放映された<sup>1)</sup>（図-1）。製作スタッフは、VIVEスタジオと共同で、娘の写真と代役を演じた同年代の少女の動きを取り入れながら亡き娘の顔や体、声を徹底的に再現した。生前の1分あまりの声データに、5人の同年代の子どもの声を800文章ずつ録音



図-1 特集VRヒューマンドキュメンタリー・「君に会った」（韓国MBCサイトより）

し、AIで声を再構成したという<sup>2)</sup>。VRによる「再会」の様子の一部はMBCLifeのYouTube公式チャンネルで視聴することができる<sup>3)</sup>。ただし、視聴するにあたっては、心の準備が必要かもしれない。

VRの女の子は、「お母さん！」と駆け寄り、「お母さんどこにいたの？ 私のこと忘れなかった？」「お母さんに会いたかったよ」と母に話しかける。母は泣きながらも、「私もよ」とVRの女の子をグローブで撫でようとする。傍から見ればその手はすり抜けるばかりなのだが、グローブによって母には触覚が伝わっているのだろう。その後、一緒に誕生パーティーをし、「お母さん、泣かないで」とVRの女の子が話しかける。自分が書いたという手紙を読み、ベッドに寝そべり、最後は白い蝶々になって去って行く。

前述した記事によれば、母は「娘に会うことができるととても嬉しかった」とコメントをしたという。筆者も記事を読んだ直後にその動画を観たものの、最後までとても観られなかった。本稿を執筆するために、改めて最後まで通して数度観たのだが、胸を締め付けられる息苦しさは、なかなか言葉にならない。これは何かの一線を越えてしまったのではないかという感覚と、自分がこの母親の立場ならば、どんな形でも亡きわが子に会おうとするだろうという気持ち、そしてこの後VRゴーグルを外すことができるだろうかと考え込んでしまった。

## 生前のデータからの再構成

日本でも、故人と「再会」する試みが放映されたばかりだった。「よみがえる」と表現された「AI美空ひばり」は、NHKの番組企画として生まれた。生前の歌声や歌唱法のデータをもとに音声を合成し、2019年12月の紅白歌合戦では新曲を披露した。曲間には「お久しぶりです。あなたのことをずっと見ていましたよ」という台詞が入った。番組ではファンが感激し涙を流していたが、シンガー・ソングライター山下達郎氏が「冒涇です」と言及するなど、これを批判的に受け止める声も少なからず上がっていた。

故人が生前に残した作品や映像を元に、新たな作品を作ること自体は、新しいことではない。マーガレット・ミッチェル著『風と共に去りぬ』の続編の件は、著作権が切れた後に勝手に続編を書かれることを危惧したミッチェルの相続人らが続編の出版を企画した。1991年に、公募で選ばれたアレクサンドラ・リプリーによる続編『スカーレット』が出版されたが、その評判は分かれた。また、2019年に公開されたスター・ウォーズシリーズの9作目『スカイウォーカーの夜明け』では、撮影前に没した俳優キャリア・フィッシャーが生前に残していた未使用の映像を用いて、レイア・オーガナ將軍の「出演」を実現している。ただ、これらは、作品を前提としての再現であり、故人自身を再構成し、新たに語らせたり演じさせたりするものではない。生前残されたデータの学習によって、本人そっくりのAIを作り声や会話を再現することは、まさに「よみがえった」と錯覚させるものであり、今後多種多様なデータをもとに学習が進めば、再現性も高まることが予想できる。その存在は、愛する人の死を悼む上でどのような意味を持つようになるのだろうか。

## 悲嘆と追悼のプロセス

死別に伴う悲嘆については、長らくフロイトの主張にもとづき、故人との絆は切断すべきであり、悲しみを乗り越えるためには、愛する人がもはや存在しないという現実を繰り返し確認する「喪の作業」が必要であるという考えがあった。一方、1980年代以降、故人への思いを発展的にすることが死別への適応につながるという見方も出てきた。たとえば、「絆の継続モデル (Continuing Bond Model)」<sup>4)</sup>では、故人との絆の継続が一定の役割を果たすことが指摘されており、近年ではFacebookの追悼アカウントにおいてそうした現象が報告されている<sup>5), 6)</sup>。追悼アカウントのタイムラインには、故人に話しかけるコメントが並ぶ。

故人との絆を確認することで、喪失の悲しみと向き合っていくことは、宗教や慣習によってさまざまな形が作られてきた。日本では、春分や秋分の日を彼岸として墓参することや、真夏の盆休みに先祖が帰ってくることを、仏壇に供え物をして故人に語りかけるといった、仏教をベースとした習慣が一般的に受け入れられている。文化や慣習によって、故人との向き合い方はそれぞれに積み重ねられており、子どもを亡くした親、不慮の事故で大切な人を亡くしたときのケアなど、経験と知見は丁寧に積み重ねられてきた。そこに、突然テクノロジーによって、故人を「よみがえらせる」かのように再構成することは、追悼のプロセスを豊かにするのか、それとも壊してしまうのか、慎重に検討する必要があるのではないだろうか。

## 共有していないはずの時間

冒頭で紹介した亡き娘のVRに戻ろう。「お母さんに会いたかったよ」という言葉の重さである。本来、生きる者と同じ時間を積み重ねることができないはずの故人が、まるで同じ時間を過ごしてきたか

のような台詞を言う。亡くなった時点の言葉ではなく、残されたデータを元に、「現在生きていたら」という条件で生成された言葉はもはや故人自身の言葉ではないはずだ。AI 美空ひばりの「お久しぶりです」も同様だ。あくまで、人間が設計したプログラムに基づいて発せられた言葉なのだ、ということ的前提に、故人のデータを用いた VR や AI を作ることに、同意できるのか。これを「再会」と言ってしまうてよかったのか。現実には、是非を考えるまでもないのかもしれない。ただ愛する人にもう一度会いたいという気持ちに任せてよいのかどうか。会いたいのは、生前のどの時点の像なのか。故人との再会を、テレビ番組としてマスメディアで共有してもよいのかなど、考えるべきことは尽きない。

故人が残すデータは、遺された側にとっては、追悼上の理由や歴史的資料という理由から貴重なものである一方で、故人本人が生前、それを残すことやそれを元に自分自身を再構成することをよしとしない可能性はある。それを元に故人を悼み懐かしむことが、感情に強く訴えることであるが故に、残されたデータを用いて何かを再構成し、「よみがえった」として「再会」することについては、それがさらなる苦しみとならないように、また詐欺などに悪用されないように、ルールを議論する必要があるだろう。自分の死後、そのデータを元に「再会」されることを許可するか、しないかも含めて検討する時期がやってきた。

#### 参考文献

- 1) MBC グローバルメディア [特集 VR ヒューマンドキュメンタリー] 君に会った [http://content.mbc.co.kr/program/documentary/3479845\\_64344.html](http://content.mbc.co.kr/program/documentary/3479845_64344.html)
- 2) ウォリックあずみ「3年前に亡くなった7歳の娘と「再会」韓国, VRを使ったテレビ特番が賛否呼ぶ」(Newsweek 2020.2.23) [https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2020/02/37vr\\_1.php](https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2020/02/37vr_1.php)
- 3) MBCLife [VR 휴먼다큐멘터리 - 너를 만났다] 세상 떠난 딸과 VR로 재회한 모녀 | “엄마 안 울게. 그리워하지 않고 더 사랑할게”, <https://www.youtube.com/watch?v=uffTK8c4w0c>
- 4) Klass, D., Silverman, P. R. and Nickman, S. L. eds. : Continuing Bonds : New Understanding of Grief Bristol, PA & London : Taylor & Francis (1966).
- 5) Getty, E., Cobb, J., Gabeler, M., Nelson, C., Weng, E. and Hancock, J. T. : I Said Your Name in an Empty Room: Grieving and Continuing Bonds on Facebook, pp.997-1000 (2011).
- 6) McEwen, R. N. and Scheaffer, K. : Virtual Mourning and Memory Construction on Facebook, Bulletin of Science, Technology & Society (33:3-4), pp.64-75 (2013). <https://doi.org/10.1177/0270467613516753>

(2020年3月2日受付)

折田明子 (正会員) [oritako@kanto-gakuin.ac.jp](mailto:oritako@kanto-gakuin.ac.jp)

関東学院大学人間共生学部准教授。2007年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科にて博士(政策・メディア)取得。中央大学ビジネススクール助教、慶應義塾大学特任講師、米国ケネソー州立大学客員教員等を経て現職。生涯のデータとプライバシーの研究に従事。EIP研究会幹事。情報社会学会理事。